



渡辺 大直

昔から農家が飼っているのは雌牛だ。コメ作りなどの農耕に必要な労力は雌牛で十分だし、子牛を売って収入が得られる。雄牛は雌牛の2倍ほどの大きさで扱いも危険。交配以外は役に立たないから農家が飼うには負担が大きい。

それでも子牛を産ませるには雄牛が要るので、村で共同利用するタネウシと呼ばれる雄牛を飼っていた。

但馬では1893年から、町村がタネウシを管理して農家の雌牛に交配した。大正の終わりになると、タネウシによって子牛の評価に差が生じた。

種雄牛誕生美方、城崎から血統拡大



立派な体格の種雄牛(左)。雌牛との差は一目瞭然
兵庫県立農林水産技術総合センター北部農業技術センター提供

1930年ごろまでに生まれた種雄牛には、美方郡の照来、八田、射添、兎塚、小代、城崎郡の奥佐津、奥竹野の集落名が付いているが、以降は但馬各地の地名が見られるようになる。

但馬各地の地名は出生地とは限らない。種雄牛として利用した所が名前になった牛もいる。調べてみると、そんな牛の出生地は決まって美方郡か城崎郡だった。また出生地が名前になっている牛でも、父親は両郡から来た牛だった。

このように美方、城崎両郡の牛が30年代に但馬各地に広がり、それぞれの地域の牛との間に生まれた子牛によって分化し、現在の但馬牛の基が築かれた。

このころ、種雄牛の名前に生まれた村の名前を付ける習慣があった。そうすると、同じ村で生まれた牛は同じ名前になってしまいそうだが、混乱しないように「第一森」「第二秋岡」「第三塩山」というように数字で識別できるようにした。中には「第三十飯野」

もいて、その名になった村は、それだけ多くの種雄牛を輩出したということになる。

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。